九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『エドワード三世』と『ヘンリー五世』：『エドワード三世』の作者の推測

徳見，道夫
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門 ： 教授 ： 言語情報学

https://doi.org/10.15017/21784

出版情報：言語文化論究. 27, pp.17-30, 2011-10-31. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

『エドワード三世』と『ヘンリー五世』
――『エドワード三世』の作者の推測――

徳　見　道　夫

I

『エドワード三世』と『ヘンリー五世』が、テーマや作品構成に関して類似していることは、多くの批評家が指摘しているところである。例えば、M. C. Bradbrook は『エドワード三世』がシェイクスピア作品の『ヘンリー五世』と『尺には尺を』と類似していると仄めかし、次のように論じている。

> A totally different set of Shakespearean connections is provided in both parts［Sonnets 93 and 94］by thematic likenesses to two plays which Shakespeare had not yet written—*Henry V* and *Measure for Measure*, both of which are subsequent to the publication of *Edward III*.(1)

上記の Bradbrook よりもはっきりと、Richard Proudfoot は『エドワード三世』と『ヘンリー五世』および『尺には尺を』との類似性を指摘しており、Kenneth Muir の論がもっとも印象に残ると述べている。

> It is most apparent in the two plays whose actions most resemble the elements of *Edward III*, namely *Henry V* and *Measure for Measure*. The degree of similarity has been fully demonstrated, most impressively by Kenneth Muir.(2)

因みに、Bradbrook は『エドワード三世』をシェイクスピアの作品とみなしていない。最近では多くの批評家が『エドワード三世』をシェイクスピアの作品であると認める方向に傾きつつあるが、(3) Bradbrook の著書 *The Living Monument—Shakespeare and the Theatre of his Time* が出版された1976年当時は、Bradbrook の見解が普通だったのであろう。Bradbrook の著書が出版された年の９年後にあたる1985年には、Proudfoot が上掲の論文で、『エドワード三世』はシェイクスピアの作品であり、しかも単独で書いたことを積極的に論じている。

Proudfoot の論文から13年後の1998年に、The New Cambridge Shakespeare シリーズの一つとして『エドワード三世』が出版されたが、そのケンブリッジ版『エドワード三世』の編者である Giorgio Melchiori は、『エドワード三世』とシェイクスピアの歴史劇第２四部作（『リチャード二世』、『ヘンリー四世』１部、２部、『ヘンリー五世』）との類似点を、次のように列挙している。

> In fact it［*Edward III*］prefigures all three Henry plays: its first two acts correspond to Prince Hal's

dissipation and reformation in *1 Henry IV*; the lesson imparted to the Black Prince at Crecy and his knighting in Act 3 parallel the lesson to Prince Hal at his father's death-bed and his coronation in *2 Henry IV*; and the obvious analogies between Acts 4 and 5 and the famous victories celebrated in *Henry V* are emphasised by the acts of magnanimity and reunion at the conclusion of the plays: Edward, finally reunited with Queen Philippa, pardons at her request the burghers of Calais; Henry atones for the ruin caused to France by marrying Princess Katherine.(4)

Melchiori の論点を簡単にまとめれば、『エドワード三世』の１幕と２幕は、ハル王子が放蕩の末に改心することに匹敵し、黒太子のクレシー（Crecy—1346年イングランドがフランスに大勝した地）での試練と騎士爵位の授与は、ハル王子が父王ヘンリー四世の死に直面し、王位を継承する時期と重なる。また両作品の主人公はフランスで圧倒的な勝利を得る。さらにエドワードは王妃フィリッパ（Philippa）の嘆願を容れて反抗していたカレーの市民を許し、ハルはフランスへ与えた甚大な被害を償うために、フランス王女キャサリン（Katherine）と結婚する。Bradbrook の論旨と異なる点は、Melchiori が『エドワード三世』と『ヘンリー五世』を含めた第２四部作との類似点を指摘していることである。彼の考え方では、ヘンリー五世と対応する人物はエドワード三世と王子黒太子の両人となる。比較する視点は異なっていても、様々な批評家が『エドワード三世』と『ヘンリー五世』との類似点を指摘していることは興味深い。本稿では、Bradbrook や Proudfoot、Melchiori の指摘をもとに、『エドワード三世』と『ヘンリー五世』の両作品を比較・検討することによって、『エドワード三世』の作品としての質を評価してみたい。さらにその評価を基にして、『エドワード三世』の作者にも言及することとする。(5)

Ⅱ

Bradbrook や Melchiori が指摘しているように、『エドワード三世』と『ヘンリー五世』との類似点は多い。まず、両作品ともイングランドの血統が持つフランス王位継承権問題から始まる。『エドワード三世』では、フランスからの亡命者アルトワ（Count of Artois）が、エドワード三世に正統なフランス王位継承権があることを説明する。この亡命者であるアルトワについては、次のようなホリンシェッド歴史書の説明がある（Raphael Holinshed が中心に編纂した歴史書、1580年に Holinshed は死亡するが、1587年に出版された第二版は、彼の後継者が中心になって編纂したもの）。

This yeare［1337］was the warre proclamed betwixt England and France, cheefelie by the procurement of the lord Robert Dartois, a Frenchman, as then banished out of France, vpon occasion of a claime by him made vnto the earledome of Artois. This lord Robert after he was banished France, fled ouer vnto King Edward, who gladlie receiued him and made him earle of Richmond.(6)

"cheefelie by the procurement of the lord Robert Dartois" という表現から明らかなように、ホリンシェッドの歴史書では、アルトワの言葉を聞いてエドワード三世がフランスに宣戦布告をしたと記述されているが、もちろんそれだけで宣戦布告をするはずはなく、エドワード三世にも様々な計算があったはずである（*Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004, edited by H. C. G. Matthew and Brian Harrison の Edward III の項を参照）。それはともかく、『エドワード三世』の作者は、上記のホリンシェッド歴史書の記述を参考にしていることは明らかであるが、この記述

は、Jean Froissart (1337-1410、フランスの年代記作者) ではなく、Polydore Virgil (1470-1555、イタリアの歴史家) などの歴史書に従っている。『エドワード三世』の作者が、劇冒頭場面ではホリンシェッドの簡潔な描写を参考にしていることは興味深い。

『エドワード三世』のアルトワの言葉を信じるならば、イングランド王家が持つフランス王位継承権を彼がエドワード三世に詳しく説明する理由は、祖国フランスへの愛のためであることになる (Perhaps it will be thought a heinous thing, / That I, a Frenchman, should discover this, / But heaven I call to record of my vows, / It is not hate, nor any private wrong, / But love unto my country and the right / Provokes my tongue thus lavish in report.—I. i. 30-35)。[7] 次に引用するエドワード三世の言葉は、彼がアルトワの説明を全面的に受け入れている様子を示している。

This counsel, Artois, like to fructful showers,
Hath added growth unto my dignity,
And, by the fiery vigor of thy words,
Hot courage is engend'red in my breast…. (I. i. 42-45)

しかし「祖国フランスへの愛のため」というアルトワの発言は、フランスから大使としてやってきたロレーヌ侯爵 (Duke of Lorraine) を激怒させ、アルトワを "Regenerate traitor" (I. i. 105) と罵倒するまでとなる。*Oxford English Dictionary* では、"regenerate" を "degenerate, renegade" と注釈して、この箇所を引用しているが、アルトワが過去の仲間と決別してまで、エドワード三世が持つフランス王位継承権を言い立てる劇的効果に注目したい。この劇的効果を得るために、『エドワード三世』の作者は、Froissart の詳細な描写ではなく、Holinshed の簡潔な説明を利用したことは明らかである。

一方、『ヘンリー五世』の場合は、カンタベリー大司教 (Archbishop of Canterbury) がヘンリー五世にフランス王位継承権があることを告げる。カンタベリー大司教の目的は明白で、宗教界への課税を軽くするためである。そのことは 1 幕 1 場のイーリー司教 (Bishop of Ely) とカンタベリー大司教との話し合いで明らかになる。その中でイーリー司教はカンタベリー大司教に "But, my good lord, / How now for mitigation of this bill / Urg'd by the commons?" (I. i. 69-71) と不安げに尋ねている。[8] アルトワはフランスからの亡命者であり、カンタベリー大司教はイングランド宗教界の人間で、しかも高い地位を占めている。常識的に考えれば、亡命者であるアルトワより、宗教界の重鎮であるカンタベリー大司教のほうがより大きな信頼性があると思われるが、フランス人であるアルトワがイングランド人であるエドワード三世に、フランス王位継承権のことを話すのも、逆の意味で迫真性がある。ただ、『ヘンリー五世』のほうが、サリカ法の扱いについて詳しい描写があり、『エドワード三世』のフランス王位継承権の扱いは、フランス遠征の法的裏付けのみを欲しているという印象を受ける。ヘンリー五世が、イングランドの人心をまとめるために、フランスへの戦争に駆り立てられたことも、両作品の冒頭場面の差異となって表れているのかもしれない。

次に、ソールズベリー伯爵夫人 (Countess of Salisbury) のエピソードとハル王子の放蕩と改心という類似点を考えてみよう。The New Cambridge Shakespeare シリーズの『エドワード三世』の注釈者である Melchiori は、エドワード三世のソールズベリー伯爵夫人への情欲とハル王子の放蕩を、『エドワード三世』と第 2 四部作の類似点として扱っている。確かに、それら二つの出来事は最初に比較すべき対象であるが、本稿では、エドワード三世の伯爵夫人への欲情には、『ヘンリー五世』における三人の貴族の反乱に対するヘンリー五世の態度を比較される対象として扱う。両事件とも、

主人公の人格陶冶および政治的手腕の向上に繋がっていくからである。エドワード三世は伯爵夫人への恋を断念することによって王として成長するし、ヘンリー五世も貴族の反乱という危機に直面することで、王としての器を大きくしていく。しかし、両者の違いは、ヘンリー五世のほうがエドワード三世より狡猾であり、貴族たちに罠を仕掛けているという印象がある。ヘンリー五世はワインの飲み過ぎで王の悪口を言った家臣を許そうとするが、反乱貴族であるケンブリッジ（Cambridge）、スクループ（Scroop）、グレイ（Grey）は、「王はもっと厳しくあるべきだ」（“That's mercy, but too much security”—II. ii. 44）と反論する。その後ヘンリーは彼らの不穏な動き（Southampton でのヘンリー殺害計画）を指摘して、彼らが罪の言い訳をできないような状況を作り上げていき、結局は彼らを処刑する。さらにシェイクスピアは、反乱する貴族の一人であるケンブリッジが、王位継承に近い血筋を持つ人物であることを明確に書いていない。ただ、王権に対する反逆者として片付けているだけである。ケンブリッジが王位の血に近いとするならば（エドワード三世の第５子 Edmund of Langley, 1st Duke of York の子孫）、彼らの反乱にも正当性が生まれてくるのである。シェイクスピアは『ヘンリー五世』の中で、イングランドの王位継承問題に触れることを避けたのであろう。その問題に深入りすれば、ヘンリー五世による王権強化のストーリーが十分に語れないことになる。そう言えば、シェイクスピアは『ヘンリー五世』で Sir John Oldcastle が中心となって引き起こすロラード事件への言及も避けている。この事件はヘンリー五世の治世では、相当大きな政治的影響力を持った事件であるが、シェイクスピアが描こうとする『ヘンリー五世』という作品に入れるには、あまりにも重大過ぎる事件であったと言える。

それに比べると、エドワード三世のソールズベリー伯爵夫人への行為は、政治的に考えれば青臭いとも言える。しかも自分の思いを秘書であるロドウィック（Lodowick）を使って伝えようとする場面は、本人の思いが真剣であればあるほど、滑稽じみてくるのは否めない。しかし、国王が人の道に外れた行為をすると、地位が高いだけに、他の政治的事象に及ぶ影響は大きくなる。それは、彼が黒太子や家臣ダービー（Derby）、オードリー（Audley）に対して、フランス遠征について好い加減な指示を与えることから明らかになる（２幕２場）。ソールズベリー伯爵夫人のことをきっぱりとあきらめた時点から、エドワード三世は国王としてふさわしい行動を取り始める。

Warwick, I make thee Warden of the North:
Thou, Prince of Wales, and Audley, straight to sea;
Scour to Newhaven; some there stay for me;
Myself, Artois, and Derby will through Flanders
To greet our friends there, and to crave their aid.
This night will scarce suffice me to discover
My folly's siege against a faithful lover;
For, ere the sun shall［gild］the eastern sky,
We'll wake him with our martial harmony.（II. ii. 202-210）

エドワード三世は、それまでとまるで人が変わったように、てきぱきと家臣や黒太子に指示を出し、自らも戦争へ赴く準備をする。

さらに複眼的な視点という観点からこのエピソードを考えれば、『ヘンリー五世』では、家臣たちが王の反逆者たちへの取り扱いについて噂をするが（２幕２場の冒頭）、『エドワード三世』では、そのような複眼的視点を導入することはない。直線的に、エドワード三世が恋のために変貌する様子

を描写するだけである。ソールズベリー伯爵夫人のエピソードに関与する登場人物は、エドワード三世、ソールズベリー伯爵夫人、ウォリック（Warwick ── 伯爵夫人の父親）、ロドウィックの４人だけである。一方、ヘンリー五世が反逆を企む貴族たちを泳がせていることは、多くの人物が知っていることになっている。したがって『エドワード三世』の中では、王の恋は密室の中の出来事であるが（結果的には、公的にも影響が出る）、『ヘンリー五世』では、公の出来事として扱われる。『エドワード三世』のソールズベリー伯爵夫人のエピソードと同じような内容が、『ヘンリー六世』３部で描かれるエドワード四世によるエリザベス（Lady Elizabeth Grey）への求愛場面にある。Kenneth Muir は、『エドワード三世』のエピソードのほうがはるかに文学的に優れていると評価しているが、[9] 複眼的視点という面から見れば、『ヘンリー六世』３部の描写のほうが、よりシェイクスピアらしい表現であると考えられる。エドワード四世がエリザベスに求愛しているとき、エドワードの弟であるグロスター（Gloucester、後のリチャード三世）とクラレンス（Clarence、グロスターの兄で後にグロスターから殺害される）が同席しており、兄王の求愛に鋭い批評を加えている（『ヘンリー六世』３部の３幕２場を参照のこと）。このようにある事象に対する思いを様々な登場人物の視点から語らせることによって、シェイクスピアはその問題をより多角的・重層的に見ることを観客に強制する。さらにシェイクスピアが『ヘンリー五世』の中にコーラスを登場させたことは、複眼的視点をいっそう進めたものと言えるであろう。コーラスとは様々な視点を取り得る特殊な登場人物であり、ある面では作者そのものの視点を表現することもある。その点、『エドワード三世』は単純で直線的な描写であると言える。もし『エドワード三世』がシェイクスピアの作品であるとするならば、直線的な描写は、シェイクスピアの劇作家としての経歴の初期に、『エドワード三世』が書かれたことが理由と考えられる。

『エドワード三世』と『ヘンリー五世』の類似点は、フランスでの戦争にも現れる。エドワード三世はフランスで勝利し、息子である黒太子はフランス王を生け捕りにするという快挙を成し遂げる。またヘンリー五世はアジンコートの戦いでフランス軍に圧勝する。しかし、これらは表面的な類似性であって、少し内容を検討してみれば、質的に大きく違うことが明らかになる。それはアジンコートの戦いの前に、ヘンリー五世が王権について苦悩する場面があるからである。ここでヘンリー五世は「王権とは何か」という抽象的な意味を問い続けることになる（“And what have kings that privates have not too, / Save ceremony, save general ceremony?”—IV. i. 238-239）。このような王権への厳しい問いかけが、『ヘンリー五世』の中にはあるが、『エドワード三世』には、王権は当然の権利だという発想がある。少なくともエドワード三世の胸中には、王権への疑いはない。父エドワード二世から苦労して受け継いだイングランド王位を守るという激しい思いがあるだけである。そのため『エドワード三世』では、表面的には王権への問いかけは表れてこない。ただエドワード三世とソールズベリー伯爵夫人とのやり取りの中や、エドワード三世の戦場での黒太子への仕打ちなどに、王権を担う人物への問いかけが垣間見えるだけである。伯爵夫人は “In violating marriage’ sacred law / You break a greater honour than yourself.”（I. ii. 260-261）と王に語り、王権は神の律法より低いと決めつける。また黒太子が危機に陥ったとき、エドワード三世は、“Audley, content; I will not have a man, / On pain of death, sent forth to succour him.”（III. iv. 33-34）と叱りつけ、黒太子の王（将来の）としての技量を見極めようとする。このような視点から見れば、ヘンリー五世の王権への問いかけは多分に形而上的であり、エドワード三世の王権への思いは、より具体的であり、現実的なものと言えるであろう。

Melchiori も指摘しているが、エドワード三世が劇の最後に示す降伏したカレー市民への寛容な態度は、ヘンリー五世がフランス王女キャサリンと結婚したことに通じる。しかし、両者の行為は自

国の安泰のことを考えたことであって、心からの慈愛から出た行為ではないであろう。エドワード三世は妻フィリッパの助言を受けて反抗していた市民を許すし、ヘンリー五世はフランスへの王位継承権をより堅固にするためにフランス王女キャサリンと結婚するのである。またエドワード三世の「許す行為」とヘンリー五世の「結婚」は、決して同じ行為ではない。許す行為は上からの目線であり、結婚は同等の立場の結びつきになる。それはヘンリー五世とフランス王女キャサリンの対話を見れば明らかになる。ヘンリー五世が母国語ではないフランス語で求愛する場面は（５幕２場）、自己を一段と低めた気持ちで（あるいはキャサリンと同等の立場に立って）王女と向かい合っていることを示す。ただ、ヘンリー五世とキャサリンの結婚については『ヘンリー五世』のエピローグで不吉な予言が行なわれ、この幸せな状態が永く続かないことを匂わせている。このような劇の終わり方は、『エドワード三世』とはかなり趣を異にするものである。[10]

以上見てきたように、これまで様々な批評家が『エドワード三世』と『ヘンリー五世』との類似性を指摘してきたが、それは表面的なものであり、一歩作品内部に踏み込むと二つの世界は大きく異なっていることが明らかになってきた。

Ⅲ

前節で『エドワード三世』と『ヘンリー五世』との類似点について検討してきたが、その類似点は表面的なもので、少し深く掘り下げると両作品の違いが明らかになった。本節では両作品の間にある相違点（王権への思い、家臣との交わり、死への瞑想）を検討してみよう。第 II 節でも触れたように、『ヘンリー五世』の中には執拗なほどに王権への拘りがあるが、『エドワード三世』には王権に対する疑念はまったくない。エドワード三世と黒太子は、王としてふさわしい人物であるかどうかが焦点となっている。彼らの行為の描写に、王権への疑念が垣間見えるが、少なくとも登場人物が王権への疑いを口に出して問いかけることはない。それは政治的な状況の違いからかもしれない。ヘンリー五世の父ヘンリー四世は、リチャード二世を廃して王位に就く。この事件の裏には、王権は奪い取ることができるという事実があり、奪い取れる王権とは一体どのような意味があるかと、ヘンリー五世は自問する。そのためヘンリー五世は王権を正当化するために外征し、フランス王位継承権を主張しなければならないのである。「フランス王にならなければ、イングランド王ではない」“No king of England, if not king of France!”（II. ii. 193）という台詞は、この間の事情を明白に物語っているものである。王権への疑念は、そのような苦しい政治的状況に立たされたヘンリー五世にとって、当然の疑問だったかもしれない。一方、エドワード三世には王権を死守するという気概が見える。それは王権を得た苦しい経緯がエドワード三世にはあるからであろう。父王エドワード二世の妻イザベラ（Isabella、その所行から she-wolf of France とも呼ばれている）は、愛人のモーティマー（Roger Mortimer）とともに、国王に反旗を翻し、息子であるエドワード三世に王位を与えるが、彼らの専横ぶりに怒ったエドワード三世は、彼らを追放して親政を実施するに至る。ヘンリー五世の場合は父王ヘンリー四世がリチャード二世を廃位するが、エドワード二世の廃位には直接エドワード三世も関わっているのである。このようにヘンリー五世とエドワード三世の王に至る道がそれぞれ違うので、王権に対する思いも違うのは当然なことである。

さらに両作品の大きな相違点は、ヘンリー五世とは異なり、エドワード三世には家臣との接触があまりないことである。ヘンリー五世はアジンコートの戦いの前に、家臣を“brother”と呼び、かなり親密な関係を保とうとしている。彼の有名な演説“We few, we happy few, we band of brothers; / For he to-day that sheds his blood with me / Shall be my brother…”（IV. iii. 60-62）は、彼が家臣との垣

根を取り払おうとする努力の表れである。アジンコートの戦いの後に、死者の数を計算するとき、貴族は名前を呼んでいるが、平の兵士は数だけになろうが、[11] ヘンリー五世は家臣とのつながりを大事にする王である。その裏には、彼の父ヘンリー四世が王権を手に入れた経緯が常に絡んでいる。それに引き替え、エドワード三世は孤高の政治家なのかもしれない。『エドワード三世』の作者は、王と家臣という関係を捨象して、劇の中心テーマだけを書いているが、エドワード三世には、ヘンリー五世に語りかけるウェールズ出身のフルーエリン（Fluellen）のような兵士がいない。政治的には何も悩むことなく、自分で何事も決めていく人物として描かれている。本稿の冒頭に言及したBradbrookは、この劇が大きな劇場ではなく、個人の家で上演されたから、多くの兵士を登場させなかったと論じているが、[12] その事実は王自身の性格と作品の質にも関与しているであろう。フランスでの戦いで黒太子が窮地に陥ったときに、援軍を差し向けずに、エドワード三世は“We have more sons / Than one to comfort our declining age.”（III. v. 23-24）と平然と言い放つのである。

『エドワード三世』と『ヘンリー五世』との相違点は、『エドワード三世』には黒太子の死への瞑想が織り込まれているが、『ヘンリー五世』にはそれがないことである。間接的には、『ヘンリー五世』の中にも死への思いはあるが、登場人物が口に出して話すことはない。「死への瞑想」という面から考えれば、『エドワード三世』は『ハムレット』のほうへ内容的には通じているのかもしれない。しかし、黒太子が死を覚悟したときに話す言葉、

I will not give a penny for a life,
Nor half a halfpenny to shun grim death,
Since for to live is but to seek to die,
And dying but beginning of new life.
Let come the hour when He that rules it will,
To live or die I hold indifferent.（IV. iv. 157-162）

は当時の死に対する一般的な感想を語ったものである。ハムレットの死への思いは、父王の亡霊から触発されて自然と湧き起こるものであるが（死への思いは『ハムレット』全編にあふれている）、黒太子の死への思いは、死を前にした武人の感想であり決意である。ハムレットの死への思いは形而上的であり、黒太子の死の瞑想は、具体的かつ現実的なものである。

これまで『エドワード三世』と『ヘンリー五世』の作品を比較・検討してきた。それは多くの批評家が、両作品の共通性や類似性を指摘しているので、その論旨を再検証するためであった。結論としては、確かに両作品にはかなりの類似性が存在するが、仔細に検討してみると、類似性より質的・表現的な差異が目立った。その事実からすぐに両作品は別の作者とは決めつけることはできないし、反対に作品の構成やテーマの類似性から作者が同じかどうかを論じることも難しい。何故なら、劇作家は構成においても言語使用においても、作品ごとに変化する可能性が大きいからである。そのような観点から、本稿の筆者は、『エドワード三世』の作品としての質の高さと『ヘンリー五世』との類似性や差異の考察から、この作品がシェイクスピアの作品である（その可能性が高い）という立場に立つ。別言すれば、両作品の類似性ではなく、質的差異の存在がむしろ『エドワード三世』がシェイクスピアの作品であることを証明しているのではないかと考えている。それは、シェイクスピアという作家は、扱うテーマが同じであっても、テーマに切り込んでいく手法が作品によって異なるからである。したがって、『エドワード三世』と『ヘンリー五世』との差異は、シェイクスピアが『エドワード三世』の作者という論を否定するのではなく、むしろその論を肯定してい

ると逆説的に考えられる。これまでの批評家たちは、『エドワード三世』とシェイクスピアの他の作品との類似性を指摘して、『エドワード三世』はシェイクスピアの作品であると論じてきたが、本稿では質的差異がむしろシェイクスピア説の理論的根拠と見なしているのである。その質的差異は、シェイクスピアの作家としての成長を物語っているのであり、初期の作品である『ヘンリー六世』と経験を積んだシェイクスピアが書いた『ヘンリー五世』を比較して見れば、それは明らかになる。当然のことであるが、ある作品をシェイクスピアの作品であると100%断定することはできない。しかしながら、状況証拠の積み重ねで、その可能性が高いことを指摘することはできる。次節では、「シェイクスピア作者説」のこれまでの批評を概観し、その後、本稿のこれまでの考察（『エドワード三世』と『ヘンリー五世』との比較検討）をもとに、「『エドワード三世』はシェイクスピアが作者である可能性が高い」という理論的根拠として、６つの項目を挙げてみたい。

Ⅳ

まず『エドワード三世』の作者についての批評動向を歴史的に概観しておこう。E. K. Chambers は1930年に出版した *William Shakespeare: A Study of Facts and Problems* の第１巻で、“Its literary quality is higher than that of the bulk of the play, and it makes a comparatively free use, about 12 per cent., of feminine endings.”(13) と語り、ソールズベリー伯爵夫人の場面（その他に４幕４場）は、シェイクスピアが書いたものであると認めているが、シェイクスピア作者単独説を採っていない。それから30年後の1960年に、Kenneth Muir が、*Shakespeare as Collaborator* の中で、『エドワード三世』の中にはシェイクスピアの筆致に匹敵する部分もあるが、シェイクスピア単独の作品ではないと論じている。(14) その批評的傾向を M. C. Bradbrook も引き継いでいることになる。前述したように、その後 Richard Proudfoot が1985年に『エドワード三世』のシェイクスピア単独説を唱える。彼は作品の前半部分と後半部分は比喩的に呼応していることを主張の根拠として挙げている。(15) さらに1987年に、Gary Taylor と Stanley Wells は、“…if we had attempted a thorough investigation of candidates for inclusion in the early dramatic canon, it would have begun with *Edward III*.”(16) と語り、『エドワード三世』がシェイクスピアの作品である可能性がかなり高いことを認めている。1991年には、M. W. A. Smith が『リチャード二世』よりも『エドワード三世』のほうが、シェイクスピアの作品の可能性が強いと論じている。(17) これは『リチャード二世』がシェイクスピアの作品と認定されているので、当然『エドワード三世』もシェイクスピアの作品である可能性が高いことを示しているが、このような批評の流れに押されて、1997年出版の第２版『リバーサイド・シェイクピア』には、『エドワード三世』が作品集の中に入っている。この事実は、『リバーサイド・シェイクスピア』の編者たちは、『エドワード三世』の作者はシェイクスピアであると、ほぼ認めていることの証拠となる。『リバーサイド・シェイクスピア』の中の『エドワード三世』の解説をしている J. J. M. Tobin（この全集の編者の一人でもある）は、シェイクスピアは以前に存在していた作品を改作して『エドワード三世』を作ったと主張する。

> The time spent on this revision, however, was enough to create a play more interesting than almost any historical drama written by Shakespeare’s contemporaries and short only of his own mature histories in brilliance.(18)

第１節でも触れた1998年のケンブリッジ版『エドワード三世』の編著者である Melchiori は、慎重を

期してシェイクスピア単独説を取っていない。彼は“*Edward III* belongs to the same period and probably involves Shakespeare at least as collaborator.”と論じ、『エドワード三世』の中に、他作家の手が入っていることを認めて、複数作者説を採っているのである。[19]

以上がこれまでの批評の概観であるが、最後に『エドワード三世』と『ヘンリー五世』の類似点や相違点の考察を基礎にして、「シェイクスピア作者説」の理論的根拠を６つあげておきたい。

１．エドワード三世は、シェイクスピア歴史劇（第１四部作、第２四部作および『ヘンリー八世』）の起点とも言える人物。

エドワード三世はリチャード二世からヘンリー八世までの歴史劇の始まりとも言うべき人物で、彼以降のイングランド国王は、少なからず彼の治世に影響を受けている。例えば、フランスとの百年戦争は彼が始めたものであり、バラ戦争の発端は、彼の子供が多かったためである。これほど歴史劇に関係する人物を、シェイクスピアが作品で描かなかったとは考えにくい。

２．作品全体の統一性。

シェイクスピアの作者単独説を採らない批評家たちの理由は、『エドワード三世』が前半の恋愛のテーマと後半の戦争というテーマで、作品が二分されているからであったが、Richard Proudfoot（1985年）の検証で、作品には明確な統一性があることが判明した。[20]

３．『エドワード三世』が文学的に優れていること。

『エドワード三世』は『ペリクリーズ』や『ヘンリー六世』のような作品より優れていると指摘する批評家もいる。[21] Karl P. Wentersdorf は、『エドワード三世』の文体は『ヘンリー五世』よりはるかに劣っていると論じているが、[22]『エドワード三世』と『ヘンリー五世』の文体の違いは、創作年代の違いにその原因があると考えられる。しかしながら、ソールズベリー伯爵夫人への求愛場面などは、シェイクスピアの筆致を彷彿とさせるものである。

４．他のシェイクスピア作品との照合性。

『エドワード三世』はシェイクスピアの他の作品からの照合が多い。Brian Walsh は“backward gaze”という視点から、“*Henry IV, Part 1* looks back on *Richard II, 2 Henry IV* looks back on both, and *Henry V* looks back on all those plays…”[23] と論じて、第２四部作における劇と劇との関連性を強調している。確かに、第２四部作の劇と劇との間には、お互いの相互言及がされている。この事実は、シェイクスピアが『ヘンリー四世』を描くときには、『ヘンリー五世』の構想が頭の中にあったことを示すものである。それゆえ『ヘンリー五世』は第２四部作の最後の作品としてきちんと収まっているという印象を受ける。『エドワード三世』には他の作品への言及はほとんどなく、独立した作品だという印象を読者に与える。しかし、『ヘンリー五世』の中には、エドワード三世への言及やこれまで考察した表面的な類似性が多く見られる。そもそも『エドワード三世』の中に、次に続くバラ戦争（『ヘンリー六世』で詳しく描かれている）の原因があるし、またヘンリー五世のフランス遠征も、フランス王位継承権問題の観点から見れば、『エドワード三世』が淵源である。『エドワード三世』の前には何の歴史劇も書いていないので、シェイクスピアは他の劇に言及しようもないが、シェイクスピアの他の歴史劇には、Brian Walsh が提唱する『エドワード三世』への“backward gaze”が存在する。

５．人民の視点の欠如。

Richard Helgerson は2003年の論文“Shakespeare and Contemporary Dramatists”の中で、シェイクスピアの歴史劇と他の作家の歴史劇を比較して、次のように論じている。

> Shakespeare's *King John* makes us think more than he makes us feel. But for all its uniqueness, *King John* resembles Shakespeare's other history plays in focusing its attention and its dramatic energy on the getting, keeping, and losing of political power.[24]

Helgerson は、シェイクスピアの歴史劇には、人民の視点が存在しないことを指摘しているが、『エドワード三世』にも確かに人民の視点がなく、作者の興味はただ王権の盛衰（the getting, keeping, and losing of political power）のみである。この視点から考えれば、『エドワード三世』は、シェイクスピアの歴史劇が持つ特質と非常によく似ている。Helgerson は王権と市民権にも触れており、“Where Shakespeare focuses his dramatic attention on what might be called the problematic of early modern kingship, his contemporaries are more interested in the problematic of subjecthood. Where, that is, Shakespeare is most concerned with the getting and keeping of power, the others ask rather how subjects are to weigh their duty to the king against other fundamental commitments, including the commitment to religious truth, to yeomanly good fellowship, to the public welfare, to home and marriage, to the city and its liberties.”（p.43）と論じて、シェイクスピアの作品には、王権への興味が充満しているが、他の劇作家はむしろ市民権とは何かという問題に関心があったと指摘している。『エドワード三世』には市民権という視点はない。

６．『ヘンリー五世』と『エドワード三世』が同じ歴史的誤謬を犯していること

Stanley Wells と Gary Taylor が述べているように、『ヘンリー五世』は『エドワード三世』と同じような歴史認識の過ちを犯している。これは『ヘンリー五世』の作者が、『エドワード三世』の作者であったことを伺わせるものである。

> Shakespeare certainly, at the very best, knew the play, for his reference to King David of Scotland in *Henry V*（1. 2. 160-2 / 293-5）follows *Edward III* in a unique historical error.[25]

もっとも、Kenneth Muir が「シェイクスピアが『エドワード三世』の芝居を見たり読んだりして、それを真似したに過ぎない」[26] と論じていることも忘れてはならない。

最後に、『エドワード三世』をシェイクスピアの作品と認めることができれば、第１四部作との豊富な関連性も表れ、これからのシェイクスピア歴史劇研究に活気が出てくるであろうし、『エドワード三世』が第１四部作の先駆けと確定することができれば、シェイクスピア歴史劇の知のパラダイムが劇的に変化する可能性もある。それゆえ、この問題はさらに詳しく論じる必要があると考えられる。

注

(1) M. C. Bradbrook, *The Living Monument—Shakespeare and the Theatre of his Time* (Cambridge University Press, 1976), p. 230. Bradbrook は同じ著書で、『エドワード三世』は "private production"（個人の家で上演される作品）(p. 231) であったことを明言している。

(2) Richard Proudfoot, "*The Reign of King Edward III* (1596) and Shakespeare," *Proceeding of the British Academy*, 71 (1985), p. 182.

(3) 河合祥一郎訳『エドワード三世』（白水社、2004年）の169頁以降を参照のこと。なお本稿の筆者はすでに『エドワード三世』の作者についての論文を書いている。「『エドワード三世』の作者について ── 歴史劇における三つの親子関係からの推測 ──」『言語科学』（九州大学大学院言語文化研究院言語研究会）46号、平成23年、pp. 47-59を参照のこと。

(4) Giorgio Melchiori (ed.), *King Edward III* (Cambridge University Press, 1990), pp. 39-40.

(5)『エドワード三世』がロンドンの書籍商組合登記簿 (Stationers' Register) に登録されたのは、1595年12月 1 日であるから、この作品は少なくともそれ以前に書かれたことは間違いない。従って、『エドワード三世』がシェイクスピアの作品であることを証明したいのであれば、『エドワード三世』と同年か同じ頃に書かれたと推定される『ヘンリー六世』や『リチャード三世』というシェイクスピア初期の作品と比較したほうがより合理的であろう。しかしながら、本論文で『エドワード三世』と『ヘンリー五世』を比較・検討する目的は、多くの批評家が認めているように、テーマが近いからであり、もし『エドワード三世』が『ヘンリー五世』と同じように、作品の完成度が高ければ、それだけシェイクスピアが作者である可能性が高いと言うことができる。もちろん、作品の質だけで作者の判定はできないが、あまりにも質の低い作品をシェイクスピアが書いたとは考えにくい。

(6) Vernon F. Snow (ed.), *Holinshed's Chronicles: England, Scotland and Ireland*, Vol. 2 (AMS Press, 1802), p. 605. Richard Proudfoot もエドワード王と黒太子の描写は、Froissart よりも Holinshed に近いと指摘している。Richard Proudfoot, *op. cit.*, p. 169を参照のこと。

(7) シェイクスピアからの引用はすべて、G. Blakemore and J. J. M. Tobin (eds.), *The Riverside Shakespeare*, 2nd Edition (Houghton Mifflin, 1997) からのものである。

(8)『ヘンリー五世』におけるサリカ法については、拙論 "The Salic Law in *Henry V*," *Shakespeare Studies*, vol. 37 (The Shakespeare Society of Japan, 2000), pp. 45-61を参照のこと。また Norman Rabkin は、"Rabbits, Ducks, and *Henry V*," *Shakespeare Quarterly* Vol. 28 (George Washington University, 1977) の中で、"The Archbishop's speech to the King follows immediately on his announcement to the Bishop of Ely that he plans to propose the war as a means of alleviating a financial crisis in the Church." (p. 290) と論じている。ところで、『ヘンリー五世』のカンタベリー大司教はヘンリーのフランス王位継承権をエドワード三世の母親イザベラから来ることを明確にしない。Holinshed も無視しているが、Edward Hall の歴史書と『ヘンリー五世の著名な勝利』(*The Famous Victories of Henry V*) は、はっきりとイザベラのことに触れている。

(9) Kenneth Muir, *Shakespeare as Collaborator* (Methuen, 1960), pp. 35-36は両場面について、次のようなコメントをしている。

> It resembles in some ways the scene in *3 Henry VI* in which Edward IV's advances to Lady Grey are repelled so that he is constrained to offer marriage, but it is altogether more serious and mature in its treatment of the theme.

面白いことに、Bradbrook は Muir とは正反対の評価をしている。M. C. Bradbrook, *op. cit*., p. 231 を参照。

(10) J. L. Simmons は、この結婚について、次のようなコメントをしている。

Similarly, at the end of Shakespeare's second tetralogy, the anticipated nuptials between Henry V and Katherine of France create the happy generic plenitude associated with both comic and epic closure; but, as throughout *Henry V*, the ideal is resisted in the process of its representation: the proposed union is clouded by the Epilogue's reminder about the imminent death of the heroic king and the certain failure of his and Katherine's transformative child.… (pp. 441-442)

J. L. Simmons, "Masculine Negotiations in Shakespeare's History Plays: Hal, Hotspur, and the Foolish Mortimer," *Shakespeare Quarterly*, Vol. 44 (George Washington University, 1993).

(11) Phyllis Rackin, "English History Plays," in Stanley Wells and Lena Cowen Orlin (eds.), *An Oxford Guide: Shakespeare* (Oxford University Press, 2003), p. 209.

(12) M. C. Bradbrook, *op. cit*., p. 231.

(13) E. K. Chambers, *William Shakespeare*, Vol. 1 (Oxford University Press, 1930), p. 516. また David Kathman は18世紀から『エドワード三世』のシェイクスピア説は存在していたと指摘している。David Kathman, "The Question of Authorship," in Stanley Wells and Lena Cowen Orlin (eds.), *An Oxford Guide: Shakespeare* (Oxford University Press, 2003), p. 630を参照のこと。

なお E. M. W. Tillyard は、E. K. Chambers の著書出版から14年後の1944年に『エドワード三世』の作者を次のような人物であると推測している。

We may guess that the author was an intellectual, probably young, a university man, in the Southampton circle, intimate with Shakespeare and deeply under his influence, writing in his idiom.

E. M. W. Tillyard, *Shakespeare's History Plays* (Penguin Books, 1944), p. 128.

(14) Kenneth Muir, *op. cit*., pp. 10-55.

(15) Richard Proudfoot, *op. cit*., p. 178.

(16) Stanley Wells and Gary Taylor, *William Shakespeare: A Textual Companion* (Oxford University Press, 1987), p. 137.

(17) M. W. A. Smith, "The Authorship of *The Raigne of King Edward the Third*," in *Literary and Linguistic Computing*, Vol. 6, No. 3 (Oxford University Press, 1991), p. 171.

(18) G. Blakemore and J. J. M. Tobin (eds.), *op. cit*., p. 1734.

(19) George Melchiori (ed.), *op. cit*., p. 14.

(20) Richard Proudfoot, *op. cit*., p. 168.

(21) Stanley Wells と Gary Taylor は、*William Shakespeare: A Textual Companion* (Oxford University Press, 1987), p. 137で、Kenneth Muir の説を引いて、次のように論じている。

Muir's comparison (1960) of the Countess scenes with Edward IV's wooing of Lady Elizabeth Gray (in Duke of York) also suggests that *Edward III* is more mature, and therefore later, achievement.

(22) Karl P. Wentersdorf, "*The Date of Edward III*," *Shakespeare Quarterly*, Vol. 16 (George Washington University, 1965), p. 227. なお Wentersdorf は、『エドワード三世』と『ヘンリー六世』1部の類似性を指摘している (p. 231)。

(23) Brian Walsh, *Shakespeare, the Queen's Men, and the Elizabethan Performance of History* (Cambridge

University Press, 2009), p. 178.

(24) Richard Helgerson, "Shakespeare and Contemporary Dramatists," in Richard Dutton and Jean E. Howard (eds.), *A Companion to Shakespeare's Works: The Histories* (Blackwell Publishing Ltd., 2003), p. 31.

(25) Stanley Wells and Gary Taylor, *op. cit*., p. 136.

(26) Kenneth Muir, *op. cit*., p. 26.

The Comparison between *Henry V* and *Edward III*

—— On the Authorship of *Edward III* ——

Michio TOKUMI

Many critics have pointed out that there are many similarities between *Henry V* and *Edward III*. Richard Proudfoot, for example, argues that "The degree of similarity has been fully demonstrated, most impressively by Kenneth Muir." This paper shows that, although there are many areas of correspondence, we can notice their differences in design, content and expression, and it is actually these differences that prove that Shakespeare might be the author of *Edward III*. Whilst other critics insist that Shakespeare is the author of this play due to the correspondence between it and other historical plays by Shakespeare, this paper argues that it is actually the differentiation between the plays that indicate Shakespeare was the author. Of course, although we cannot say definitely that Shakespeare wrote the play, there is a strong possibility that he is the author. This paper also gives six other points that indicate to Shakespeare being the author of *Edward III* in its conclusion.